真・恋姫†無双　～天より智を授けられし者～

H∧L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双　～天より智を授けられし者～

【Ｎコード】

Ｎ０２９３Ｘ

【作者名】

Ｈ＜Ｌ

【あらすじ】

真・恋姫†無双の世界に黄月英として生まれた男が主人公の物語です。

因みにこの小説は作者の妄想及び夢やら希望やらが多分に含まれますので、お読みになる方は毒されないようお気をつけください。

と言うことで、オリ主オリキャラが許せない方、及び作者の妄想、駄文に付き合っていられない方は、お手元の『戻る』またはＢＡＣ

ＫＳＰＡＣＥキー等を押してこの作品から一刻も早く退避してください。

因みに桃園組が好きな方は桃園組の扱いの悪さに不快な思いをされる可能性があるので、この小説を読むことをオススメ出来ません。

第一回・オリキャラ紹介（前書き）

と言うことでオリキャラ紹介です。
今回紹介するのは、主人公の月英とその軍師、徐庶の二人です。
ネタバレ的なモノは含まれてませんし、読み飛ばしても構わない事がほとんどですので、読む読まないは読者様の自由です。

第一回・オリキャラ紹介

能力直は統率、武力、知力、政治、魅力の５つを１～６の６段階で表します。　因みに６は呂布の武力や劉備の魅力等のチートクラスです。

黄月英　真名・夕

統率４　武力５　知力６　政治５　魅力４

この小説での主人公、性別は何故か男。
武器は自作の改造弩で…名前はまだ無い。

性格は面倒臭がりで少し優柔不断…顔は本人曰く程々、世間では不細工と噂されているが…実物は噂と違い１０人中８人が振り向く位には美形。

前世は日本人で高校、大学は工業系の学校に進学し、製造業に就職。
２４歳の時に仕事の帰りに心臓発作で倒れ、そのまま死亡…。

氣の扱いに長けているので、一騎討ち等の時には氣を手や足、矢に纏わせ、相手に流れる氣の流れを読んで戦う。　呂布とも１０分程なら戦闘が可能。

徐庶　字・元直　真名・稲里

統率５　武力３　知力５　政治４　魅力４

常に狐のお面を頭に着けている少女。
髪は桃色で、服装は水鏡女学院の制服、月英の軍師。

諸葛亮、鳳統と同じく水鏡女学院で学んでいたが、仕官先を探して劉表の元を訪れた際に月英と偶然出逢い、その時に何かを感じたらしく…そのまま月英に仕官する事に…今の武器は数打ちで無銘の剣。

第一回・オリキャラ紹介（後書き）

と言うことでオリキャラ紹介でした～。

因みに作者の予定では、他にも数名オリキャラとして登場する予定ですので、合計で１０人程は覚悟して読み進めてください。

第一話（前書き）

この小説は更新が不定期かつ、一話一話が短いことが多々あると思われます。

理由としては作者がその日の気分とノリで書いているからと言う事に成りますが…。

と言う感じに成りますが…それでも読んでいただけると言う方はこのままお進みください。

第一話

時は後漢王朝末期……皇帝の権威が衰退し、欲に眼の眩んだ宦官、領主等による圧政、相次ぐ飢饉等の天災、盗賊による略奪……それらの被害に遭う力無き民……そんな平和とは言えない乱世の兆しが見えだした時代。

そして今、一つの村が賊により滅ぼされようとしていた。
そこは荊州北部に位置する人口１００人程の小さな村。　賊に襲われればひとたまりもないであろうこの村には二人の英傑が居た。

一人は後に英雄をその知略で支える事になる軍師・徐庶…。
もう一人は後の世において『乱世の発明王』『発明の父』等と呼ばれる事となる英雄・黄月英。

これは一人の発明家が乱世を駆け抜ける物語。

「だっ旦那！　この村にもついに賊が……。　ここ十数年襲われたことなんて無かったってのに…って旦那ぁ、ちゃんと聞いてるんですかい？」

ここは荊州北部にある小さな村…。
旦那こと俺の名前は黄月英（こうげつえい）…真名は夕（ゆう）だ。　コイツの名前は知らん……と言うことで今は村人Ａ（仮）としておこう。

「賊が出たんだろ？」

「へぇ、そうなんでさぁ」

さっき村人Ａ（仮）が言ったように、この村はここ十数年間賊による被害はない。　…らしい……俺は良く知らん。

「はぁ…、この村に到着するまでに掛かると思われる時間と賊の数は？」

「数は８０～１００人、時間は四半刻程でさぁ」

「１００人か……賊が現れたのどの方向だい？」

「北の方でさぁ」

今、この村で戦えるのは多く見積もっても４０人程だろう。　それもほとんどの者が戦闘経験の無い民間人だ…。
対する賊は多少の差はあれど戦闘経験のある者達がほとんど……。
つまりこの戦力差を覆すには策を弄するか罠に嵌めるか……それ

以外に撃退の方法は無いだろう。

因みに俺の強さは程々だとは思う。　無双出来るわけじゃないが、その辺の賊に遅れをとるほど柔な鍛え方はしてないからな。

「君は今から稲里…徐庶の所に向かって欲しい」

「あのお嬢ちゃんがどうしただ？」

「徐庶に賊の襲撃が有ることと、これから俺が足止めに向かう事を伝えて欲しい。　頼めるかい？」

「別に構わねぇだが…なしてだ？」

「徐庶なら多分、今の状況で最善の対応をしてくれるだろうからね」

「分かっただ」

そう言って男は駆けていった。

「はぁ…。　稲里が村の人集めて迎撃方法を考えて教え終わるまでの間くらいは足止め出来るといいんだけどねぇ…ってことで、俺は賊の駆除も兼ねた足止めに行ってくるかねぇ」

そう言って月英もまたこの部屋を後にした。

その手に己が武器を携えて…。

第一話（後書き）

と言う感じで第一話でした。　やっぱり短いですねぇ～。

誤字脱字等のご指摘有りましたら感想にお願いします。

第二話

「この辺で待つか…」

俺は今、村から北に2里程進んだ森の中に居る…。
時間的に賊はこの辺りに居ると思う……多分だが…。
今回の賊は１００人……恐らく賊は、俺が居るこの森を通って村に向かってくるだろう……理由は至って単純……何故ならこの森の両脇には断崖絶壁……とまでは言えないが、切り立った崖があり、多人数での移動には的さない地形だからだ……にしても、１００人の賊相手に改造してあるとは言っても元はただの弩と矢が４０本……勝てる気が全くしないねぇ。
まぁ本来の目的は足止めな訳だし、何とか生きて帰れるとは思うんだけどねぇ。

「はぁ…。　俺一人でどこまで足止め出来るのかっ、ねぇ」
ヒュンッ
「っ…」
「なっ…」

先ずは一人……ってところかねぇ。

「っ、野郎共ー！！あのヤローをぶっ殺せー！！」

「「「オオォー！！」」」

「おぉう、怖い怖いってことで三十六計逃げるに如かずってねぇ」

とは言っても実際は隠れて一人ずつ消してくだけなんだけどねぇ…。

ってことで先ずは身を隠すとするかねぇ。

・・・

月英が賊の足止めをしている時、村では徐庶を中心に着々と迎撃体制が整えられていた。

さすがに初めのうちは指揮を執るのが年若い少女と言うことで動きが悪かった村人達も、徐庶の的確な指示を聞くうちに段々と動きが良くなっていた。

「徐庶ちゃん、準備整ったよ～」

「分かりました。　皆さんは賊が来るまで持ち場で待機しててください」

「おう、任せとけ！」

私の名前は徐庶（じょしょ）、字は元直（げんちょく）、真名は稲里（いなり）。

私は今、主である夕様の命で村の人を指揮して迎撃の準備をしている…と言うかしていた。　何故過去形なのかと言うと、つい今しがた迎撃体制が整ったからだ……。

装備として今回は、夕様が直々にお造りになられた連弩と言う連射性の高い弩が１４、猟などの時に村で使われている弓が１８、槍が１７本で合計４９人分の武器が使用可能になっている。　よって、若く力のあるものには槍や弓、その余りと力は落ちてしまっても賊などとの戦闘経験のある老人や女性には連弩を持ってもらった。

これによりこの村の兵……と言っても所詮は民兵だが……は合計４９人となっている。

「皆！　月英様がお戻りになられたぞ！」

声のした方を見ると、夕様がこちらに向かって歩いているのが見えた。

パッと見、怪我などは見えないようだが…。

「ご主人様、お怪我は有りませんか？」

「あぁ、大丈夫だよ。

それより迎撃の準備は整ってるかい？」

「はい。　つい今しがた整いました」

「そっかぁ、それじゃぁこのまま指揮は任せるね」

「ご主人様はどちらへ？」

「矢を受け取ったら村の人に混じって北門の周辺で戦ってくるよ」

「分かりました。　指揮は私にお任せください」

「ん。頼む」

そう言い残すと、ご主人様は矢を受け取って迎撃に向かっていった…。

・・・

村に帰って来ると、村の北門を中心に至るところで武器を手にした村人を目にした。　どうやら迎撃の準備はほとんど整っているようだ。

そんな事を考えつつ、稲里の所まで歩いて居るとすぐに稲里が見えてきた。

稲里から現状を聞いたところ、迎撃準備は既に整っているとのこ

とだったので矢を受け取り、村の北門まで歩いてきた。

「月英の旦那ぁ、俺達ぁ助かるんですかい？」

北門まで来ると、頭が少し寂しい事になってる男が話しかけてきた。

「そんなの自分達次第だよ。　どんなに優勢に戦えても諦めたら勝てる戦いも勝てないだろ？　だから今は勝てる気でいないとダメだよ」

友情、努力、勝利な漫画雑誌に載ってた某バスケ漫画の監督さん曰く、諦めたらそこで試合終了らしいからねぇ（笑）

そんな事を考えていると森の中から柄の悪い男達が雄叫びをあげながら走り出してきた。

第三話

「てめえ達ぁ、女以外はブッ殺せー！　邪魔する奴ぁ容赦すんな！！　ガキだろぉと年寄りだろうと関係ねぇ！　血祭りにあげろぉー！！」

「「「オオオォォォォォォ！！」」」

この村の北に一里程進んだ辺りから広がる森、その中から雄叫びをあげて、賊共が駆け出して来た…数はざっと数えて４～５０人程。先頭を駆けているのは恐らく頭目だろう男。

「皆さん、一射目の準備を…発射は私の合図に合わせてください！」

「「「おおおぉぉぉ！！」」」

稲里の声が村に響き渡り、それに応える様に各所から声があがる。稲里の合図にタイミングを合わせて放つために自分も狙いを定める…ターゲットは賊の頭と思しき男…。

「三、二、一、斉射！！」

合図と共に何本もの矢が賊に降り注ぐ…俺の放った矢は、狙い通りに男に命中し、その男の命を奪っていた。

「皆さん、二射目の準備を急いでください！　……三、二、一、斉射！！」

稲里の合図を受け、矢が賊に降り注ぐ…二度目の一斉射を受けた賊は、その数を２０人程に減らしていた。

頭…多分だが…を失い、数をこんなに減らされても逃げ出さないって…こいつら極度の馬鹿か？　それとも何かしらの策でもあんのか？

そんな事を考えていると、賊が蜘蛛の子を散らすようにバラバラと別れ、退却を始めた。

その様を見ながら淡々と矢を放ち賊の数を減らしていると、賊が走り出してきた森から槍を手にした男達が数名飛び出し、賊を串刺しにしていく…。

それに呼応するかのように村からも、槍を手にした男達が賊の追撃に向かっていった…。

「ふぅ…ひとまずは完勝って所かねぇ」

そう呟きながら賊が討ち取られていくのを見ていると、どうやら最後の一人が討ち取られた様で、最後の賊を討ち取った村人Ａ（仮）

が、『勝鬨をあげよー！！』とか叫んでいるのが聞こえ、村の人達が一斉に鬨の声をあげた。

その様を見ながら、一人あたふたしている人物見つけたので、話し掛けてみる。

「そんなにあたふたしてどうした？」

「えっ？　ご主人様？」

「うん。　ご主人様」

「そうですが…はぁ」

「で、どうしたんだい？」

「えっと…報告で、賊の数は１００人程と聞いていたのですが…さっき出てきた賊って５０人位でしたよね？」

「うん。　それくらいだったねぇ」

「つまり賊は、あと５０人残っている計算になるんです」

「……」

そう言えば報告ん時に減らした賊の数、伝えるの忘れてた気が……アハハハハ。

「その事なんだが、多分……」

「ご主人様？」

「その……報告の時に忘れたと言うか…報告した気になっていたと言うか…アハハハハ」

それを聞いていた稲里の額に青筋が…アレ？　めっちゃ笑顔だ…でもなんでだろ、満面の笑みの筈が恐怖を感じるんですが…ってか寒気がヤバイんですけど…。

「ふふ、ご主人様？」

「ハ、ハイ。　ナンデショウカ？」

アハハハハ…俺、明日生きてるかな…。　等と私にも思っていた時期が有りました……なんて現実逃避をしていると、村人Ａ（仮）達が帰って来たらしく、俺達の方に走って来るのが視界に入った。

「旦那ぁ～」

今の状態から一刻も早く抜け出したい俺は、村人Ａ達を使い話を変えるべく村人Ａに向き直り話し掛けようとするが、それを察してか稲里からの説教が開始されてしまった。

因みに今回の襲撃による被害は、軽い怪我をした者がほんの数名いただけで死者及び重傷の者が出なかった様で、この日村では宴が催され、かなり盛り上がったらしい…。

何故『らしい』なのかと言うと、稲里の説教が夜が明けるまで続き、終わったときには既に宴も終わり、ほとんどの者が眠りについていると言う状態のせいだったりする。

第四話

「うぅ……み、水……」

俺は今、村人Ａ（仮）の家に居る。　念のために言っておくが、この家には重病人が居るわけではない。

「だ、旦那ぁ……どうか水を……水をお恵みくだせぇ……」

俺が今ここに居るのは、昨日の戦闘で何気に活躍していたコイツ……稲里が言うには村の代表らしい……に、ちょっとした話しをしようと思ったからなのだが……昨晩の宴で飲み過ぎたらしく、今は二日酔いで話せる状態ではないようだ。

「はぁ……自業自得だ……諦めて話だけでも聞いて「うぷッ」……話しはまた後日、今日のところは失礼する」

「ちょ、旦那？　帰るなら責めて水……うぷっ……」

後ろの方から何か聞こえた気がするが、今はスルーしたいなぁ……吐瀉物にまみれるなんて、真っ平だし……ってことでス「ご主人？」

ルー……はさせてもらえないらしい。

「ヤダナァ、冗談ニ決マッテルダロ？」

「では部屋から出ようとせずに、大人しくこちらに来て話を再開してください……水は私が取ってきますから」

それって最近流行りの俺を生け贄に稲里召喚……もとい生還とかってやつかい？

なんて冗談は置いとくとして……話を戻そう。

「では、話を再開しますね？　この際前置きとかは面倒なので省きますが……明日にでもこの村を出ていこうと思います。　その際この村に連弩を幾つか寄付しようと考えているんですが、受け取ってもらえますか？」

「ぅぅ……旦那の造った連弩なら幾ら置いていっても構わねぇだよ」

「そうですか……では、話すべき事は話しましたのでこれにて」

俺はうめき声をＢＧＭにしながら部屋を後にした。

稲里を待たないのかって？　あいつは先に帰ってるよ。　何で分かるのかって？　だってあいつあの部屋にあった水差し持ってかなかったんだぜ？　持ってくる気ゼロじゃん。

そんな訳で、俺もさっさと退散しないとねぇ。

長居したんじゃ本当に吐瀉物まみれになりかねないからねぇ

・・・

翌朝、俺達二人はこの村を発ち、旅を再開した。
旅の目的？　そんなの優秀な人材の勧誘と種蒔きに決まってるだろ？　どんな種を蒔くのかって？　今は秘密さ。
目的地？　人材って言ったら許昌だろ？　洛陽も棄てがたいけどな……。

第五話

「麻婆丼の並２つ！」

「あいよ！」

「じゃあ俺はこの親子丼ってやつの並で！」

「かしこまりました。　少々御待ちください」

今、俺達は許昌にいる。
時間が跳びすぎだって？　しょうがないじゃんか道中、何も無かったんだからさ。
今は何をやってるのかって？　見てて分かんないもんかなぁ……まぁ普通は分かんないか……今は屋台で丼物専門店開いて商売してるところだ。
何で許昌に来てまで商売してるのかって？　そんなの優秀な人材に関する情報収集と資金集めを同時進行で進めるだよ。
成果はあったかって？　人材の方は微妙だったな……その代わりに商売の方は大成功だけど……。

「お待たせしました。　こちらが麻婆丼です」

「ハイ。　親子丼の並ね！」

そんな感じで接客していると、稲里が小さな声で話し掛けてきた。

「ご主人様……あの三人組…」

稲里の視線の先には三人の少女達が居た……一人は頭に太陽の塔っぽい人形を乗せた金髪ロングの少女……もう一人は眼鏡を掛けた真面目そうな少女……そして三人の中でただ一人、動きに無駄がない青い髪の少女……恐らくかなりの手練れなのだろう。

「成る程……合格だな…」

「どうしますか？」

「どうするかねぇ。　稲里はどうした方が良いと思う？」

「少し強引になってでも、ここで接触するべきかと」

「じゃあ、接触してみるかねぇ」

「分かりました」

そうと決まれば早速行動に移す。

「そこの綺麗なお嬢ちゃん達、昼はうちでどうだい？」

「ふむ。　良さそうだな……二人はどうする？」

「そうですね～良いんじゃないですか？」

「ではこの店で済ませましょう」

……まぁこれで第一関門は突破だな。

「採譜は……なっ！　店主よ……注文だ、メンマ丼のめが盛りなる物を頼む」

「風はこの麻婆丼の並みと言うので」

「では、私も麻婆丼の並みで」

「メンマ丼のメガ盛りが１つ、麻婆丼の並みが２つですね？　少々御待ちください」

……まさかノリで作ったメンマ丼を頼む猛者が居るとは……しかもメガ盛りで……世界って本当に広いんだなぁ……アハ、アハハハハ。

「稲里……あの三人組の事、任せても構わないか？」

「分かりました」

「頼む」

「それじゃぁ店長。先にあがらせてもらいますね？」

「あいよ～」

なぜ呼び方が店長なのかって？　流石に店長と店員の関係でご主人様って呼ばせるのはちょっと……ねぇ？

まぁ、あの三人組の事は稲里に任せとけば多分大丈夫だろう……問題はむしろ俺だよな～一人でこの店回せるかな……。

・・・

三人組が店にきた次の日……俺は一人、陽も昇らないうちに宿を抜け、昨晩稲里に聞いた場所に来ていた。

そこは三人組が泊まっていると思われる宿屋……。

ここまで来たのは良いものの……どうやって呼び出すか……。

「ん～、殺気でもバラ蒔いてみるか？」

「その必要は有りませぬよ。　店主殿……して、こんな朝早くからどの様な用件で？　夜這いにしてはずいぶんと遅いと思いますが

……」

どうやら呼び出す必要は無かったようだ……。
まぁそれだけ強いって事なんだけどさ。

「昨日会ったばかりの人に夜這いする様な男に見られるとは……心外ですねぇ……まぁ夜這い云々の話はこの際置いておきましょう……と言うことで用件についてですが……本日はお話をしに来ました」

「ふむ、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩですか……その話とは言葉での方ですかな？　それとも……こちらですかな？」

そう言って少女は手にした槍を構えた。

「ん～。俺としてはそっちは遠慮したいんですけどねぇ……まぁ、どっちでも構わないんですが……そっちの話をするならやっぱり、場所を移した方が良さそうですね」

「そのようですな」

それから俺達は許昌の街を出てすぐにある森の、少し開けた場所まで歩いてきた……途中、会話などは一切無く互いに無言のままここまで来た。

「ここなら周りを気にせずに戦えそうですねぇ？」

「ふむ、そのようですな」

「そう言えばまだ名乗ってませんでしたねぇ……俺の名前は黄月英、月英と呼んでください」

「そう言えばそうでしたな……私の名は趙雲、字は子龍と申す」

常山の昇り龍が相手とは……かなりキツい戦いになりそうだねぇ全く。

「その名、しかと記憶しました……それでは尋常に……」

「うむ……」

「勝負！」　「参る！」

先に動いたのは趙雲。　一気に距離を詰め、槍を突き出す。
月英はそれを紙一重でかわし、趙雲の鳩尾を狙って氣を纏った蹴りを放つ……。
しかし趙雲も後ろに跳ぶことで、余裕を持って蹴りをかわす。

「あの突きをかわすとは……店主殿も中々出来る様ですな」

「流石に手加減された突き位はかわせますよ？」

「これは少々本気を出さねばならないようですな」

「えぇ。　相手が無手だからと言って手を抜くのは駄目です……よ！　っと」

ビュン

「フッ！」

月英の放った右の蹴りを難なくかわす趙雲。
攻撃をかわされた月英は蹴りの勢いを利用して左の回し蹴りを放つ

「ハッ！」　「セイ！」

キィーン

具足等、何も装備していないにも関わらず、月英の蹴りは槍で受け止めた趙雲との間に火花を散らせた……。

「ふーっ、流石に強いですねぇ……体に当たる気が全然しませんよ……」

「ふっ、氣か……次はこちらから行かせてもらう！」

「えぇ」

「ハイハイハイハイハーイ！！」

「フッ、無駄無駄無駄無駄無駄ー！！」

ヤバイな……かなり楽しくなってきた……。

「ハァッ！」

突き出された槍を左手で弾き、彼女の右手を右手で獲える。

ガッ！

「くっ！」

「獲ったー！！　喰らえ！　一本背負いー！！」

「なっ！？」

バァン！

「でもってそのまま腕十字！！」

カラン……。

腕十字が決まったようで趙雲の手から槍が離れる……。

「勝負ありですね」

「……降参だ……まさか素手の者に負けるとはな……まだまだ修行が足らぬようだな……」

「ふぅ……趙雲さん、大丈夫ですか？」

「案ずるな、怪我はない」

「そうですか」

趙雲は少しだけ思案する様に黙ると……ぽつりと小さな声で呟いた。

「星だ……」

「良いんですか？」

「お主になら呼ばれても構わぬ」

「……分かりました。　俺の真名は夕……この真名、星に授けます」

「その真名、しかと受け取った」

「それではそろそろ帰りましょう……」

「ふむ……勿論送っていただけるのだろう？」

「話したいことも有りますので構いませんよ」

こうして俺は星達が泊まっている宿まで、星を送っていくことになった。

・・・

「星ちゃん、昨日会ったばかりの方と逢い引きとはやりますね～」

「ふっ、私にかかればこれくら「やめい！　要らん誤解をばら蒔くな！」……真名まで交換した仲だと言うのに……」

「せ、星が殿方と逢い……逢いび……ぶーーーーーーーっ！」

眼鏡を掛けた真面目そうな少女……戯志才と言う名前らしい……因みにもう一人は程立と言うらしい……が突然、鼻血を撒き散らしながら倒れた。

「えっと……この娘大丈夫なのか？」

「いつもの事ゆえ気になさるな」

「血ぃ止まってない気がするんだけど……」

「お兄さん、気にしたら負けなのですよ」

なんだろ……二人とも戯志才の扱いが……いや、深く考えちゃダメな気がする。

あれ？　血塗れで倒れてる戯志才さん見てたら戯志才さんの周りに白チョークで線引きたくなってきた……。

「んっ……」

鼻血を出して倒れていた戯志才さんが、ゆっくりと瞼を開いき……焦点の定まっていない目で、俺を見上げてくる。

「大丈夫かい？」

「あ……」

鼻血で水分を失い過ぎたせいか、カサカサに乾いてしまっている唇は、何かを言おうとして震えている。

「稟ちゃん、稟ちゃん。　今は無理しない方が良いと思うのですよー」

「ふむ。　そう言うことで夕殿、昼にまた……」

うーん……そう言うことってどういう事なんだろ……まぁ良っか。

「あー……うん。　了解。　っともし良かったら程立ちゃん達も来てね～」

「ハイなのですよー」

「じゃあね～」

三人と別れた俺は、稲里の待つ宿屋へと歩き出した。

「星ちゃん、星ちゃん。　お兄さんとの仲はどこまで進んだのですかー？」

「ふむ……秘密だ」

「星ちゃんは意地悪さんですねー」

「……ぅぅ……ぅ……」

「ほら、稟ちゃん。　とんとんしますよ、とんとーん」

「……う、うぅ……すまん」

「稟も復活したことだ、部屋に戻るとしよう」

「ハイなのですよー」

「分かりました……」

第六話

星と真名を交換した日の昼……俺達は昨日と同じ場所で店を開きながら、星達を待っている……のだが、どうやら俺達は面倒事に巻き込まれるようだ……。

と言うのも、隣に店を開いている行商人と思われる父娘に対して、三人の柄の悪そうな男達がいちゃもんを付けている……まぁそれだけならば言葉は悪いが、対岸の火事ですむのだが、その中の一人……背のちっさい奴がリーダーっぽい男に隣の屋台の売り上げも……とか言っているのだから、このままいったら確実に巻き込まれるだろう。

「おい。　兄ちゃん、話は聞いてただろ？　痛い目に遇いたくなかったら出すもん出せや」

「はぁ。　稲里は、コイツらどうしたら良いと思う？」

「……返り討ちにして警備の者に突き出すべきかと……」

「ごちゃごちゃ言ってねぇでさっさと金出せや！」

そう言って男は懐から一振りの赤黒く汚れたナイフの様なものとり出して、こちらに剣先を向けてきた……。　って気ぃ短っ！？

でも気が短い人って、頭が固いか悪いかのどっちかな気がするんだけど……今はそんな事はどうでも良いって？　確かにどうでも良

い事だな……。

「ふぅ……、しょうがな「待てぃ！」……はぁ」

声のした方を見てみると、屋根の上には一人の少女……今朝手合わせをし、真名を交換した星が紅く輝く愛槍を手に立っていた。

「だ、誰だっ！」

「ふっ、か弱き庶人に手をあげるなど言語道断！　そのような外道に名乗る名などない！」

「おい、てめぇらー！　相手はたった一人だ！　たたんじまえ！！」

「……あいつは普通に登場する事って出来ないのか？」

「出来ないんでしょうね……」

「はぁ……あいつを仲間に引き入れるの今からでも辞めにするか？」

「でも、腕はかなり良いんですよね？」

「そうなんだよなぁ……もうすぐやって来る動乱の時代……乱世で一旗あげて成功するには、一人でも多くの優秀な人材が必要なん

だよねぇ……」

「成る程……そう言うことですか」

稲里と話していると、稲里や星とは別の方から声が聞こえてきた。

「戯志才さんと程立さんですか……どうやら御二人も中々に……」

「風や稟ちゃんにまで手を出そうとするとは……お兄さんに対する認識を改めなければいけませねー」

うーん……稲里のいる方から何故か冷たい空気が漂ってくるんだが……なんでだろ。

「ご主……店長？　幾つかお聞きしたいことが有るので少しだけお時間いただけますか？」

「あーっと……お、お客さんも居るわけだし……今はちょっと遠慮したいかなぁ……なんて……アハハハハ」

「私達の事は気にしなくても構いませんよ」

「お客様もこう言ってますし、構いませんよね？」

なっ！？　戯志才さんに見捨てられた……だと！？　くっ……な

らば！！

「程立さん！」

「……ぐー」

「なっ！？」

なんでこの娘は寝てるんだ？　さっきまで起きてて俺とも普通に話してたよな？

「ふふ、構いませんよね？」

この後、稲里が俺に事情聴取と言う名のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしたのは言うまでもないだろう……。

「風、稟……店主殿は何処に？」

「給仕の者が少し話があると連れて行きました」

「ふむ。　それでは話でもしながら待つと致すか……」

「えぇ」

・・・

「お待たせしました。　ご注文はお決まりでしょうか？」

「ん？　店主殿がまだ戻っていないようだが？」

「星ちゃん。　気にしたら負けなのですよ」

「ふむ。　では、メンマ丼のめが盛りを頼む」

「私は牛丼の並みをお願いします」

「では風はこの親子丼の並みをお願いするのですよ」

「じゃあ俺は麻婆丼のメガで」

「かしこまりました。　少々お待ちください」

……ツッコミされないのがこんなに辛いなんて……ってアレ？
目からしょっぱい水が……。

「して、店主殿……話とはどの様なもので？」

星もスルーですか……そうですか……。

「はぁ……簡単に言うと、君達の主候補に俺の名前も加えてもらえたら嬉しいなぁって感じかな？」

「ふむ……」

「あぁ、返事は今じゃなくても良いよ？」

「えぇ」

「うむ」

「……ぐー……」

また寝られた！？

「仕方ない……か、食らえ！　てい！」

ビシッ！

「……おぉっ！？」

「話はちゃんと聞いてたっぽいから良「お待たせしましたー！」

……はぁ」

「お兄さん、気にしたら負けなのですよ」

「うん。　そうだね」

「店主殿。　話は変わるのだが、店主殿はいつまでこの街に？」

「ん～。　明後日か明明後日にでも出ようかなぁとは思ってるけど？」

「向かう場所は決まっているのですか？」

「目的地ねぇ。　ん～……決まってはいないけど、洛陽には行ってみたいんだよねぇ……星達は？」

「私達は明日にでもこの街を離れて、陳留の刺史……曹操様、袁紹、公孫賛の順に回ろうかと……」

曹操だけ様なのは何故だろう……。　戯志才さんのお気に入り的な感じ？

「店主殿……気にしたら負けですぞ？」

星って読心術まで使えるのか！？　それとも俺が分かりやすいだけなのか？

「お兄さん、気にしたら負けなのですよ」

「……そうみたいだね……」

口に出さなくても伝わるなら話すのやめようかな……。

「店主殿。　時には言葉に出さなければ伝わらぬことも有りますぞ？」

「ソウデスネ」

やっぱり言葉に出さなくても伝わってる気がするんだが……。

「月英殿……気にしたら負けですよ」

俺が本気になればポーカーフェイスくらい……。

「店長……人間、諦めが肝心です。　しつこい作者……男は嫌われますよ？」

「今作者って……はぁ」

気にしたら負けですね……流石にもう分かりましたよ……。

「話を戻しますが、何故俺達の予定を？」

「もし良かったら同行を……と思いましてな……」

「同行出来ず申し訳無い……」

「気になさるな。　店主殿……では、そろそろ……」

「そうですね……」

「えぇ」

「では店主殿……馳走になった！」

そう言い残して、星達は去っていった……。

代金を支払わずに…。

「三人の代金はご主人様のお小遣いからひいときますね？」

「……はい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0293x/

真・恋姫†無双　～天より智を授けられし者～

2011年10月25日02時48分発行